

令和元年6月27日現在

機関番号：34425

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370376

研究課題名(和文) ケベック・ベルギー・スイスの仏語圏文学にみる脱周縁性とトランスナショナルな変容

研究課題名(英文) Post-marginality and transnational transformation in French language literature in Quebec, Belgium and Switzerland

研究代表者

真田 桂子 (SANADA, Keiko)

阪南大学・流通学部・教授

研究者番号：60278752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ケベック、ベルギーを中心とする仏語圏文学において、ケベックを拠点に世界的に活躍するレバノン出身の劇作家ワジディ・ムワウド(Wajdi Mouawad)、難民としてケベックに移住したベトナム系仏語表現作家のキム・チュイ(Kim Thuy)、トルコ系移民としてベルギーに移住し仏語により創作活動を行っているケナン・ゴルグン(Kenan Gorgun)らに注目し、それらの作品が移民・難民文学としての枠組みを超えて受容され、仏語圏全般に脱周縁的でトランスナショナルな変容をもたらしている状況を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ケベック、ベルギーを中心とする仏語圏文学を例にとり、これまで周縁に追いやられていた移民・難民文学や抑圧された状況にあったマイノリティ文学が世界文学として普遍的で象徴的な意味をもち、仏語圏文学全般にトランスナショナルな変容を促していることを検証した。そしてその文学動向を通して、グローバル化の進捗と社会の多元化に伴い、社会的秩序や価値観の再編が生じている状況を浮き彫りにした。

研究成果の概要(英文)：This study about French-language literature centered on Quebec and Belgium focused on Wajdi Mouawad, a Lebanese dramatist who is based in Quebec. Furthermore, it includes a Vietnamese-French expressionist artist Kim Thuy who moved to Quebec as a refugee, and also focused on Kenan Gorgun, who moved to Belgium as a Turkish immigrant and works creatively in French. We examined that the works from the above-mentioned artists are accepted beyond the framework of immigrant and refugee literature. We demarcated trans-transit throughout the French-speaking world, and we brought forward the situation about transnational transformation.

研究分野：仏語圏文学

キーワード：仏語圏文学 ケベック ベルギー 脱周縁性 トランスナショナル 移民・難民文学 多元社会 多層的ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の今日、文学においてもこれまでの既成の枠組みでは捉えきれない様相が顕著となり、とりわけナショナルな概念を基盤に文学を分類し考察することはますます困難になっている。ケベックとベルギー及びスイス仏語圏は、それぞれ新大陸と旧大陸にあるという違いはありながら、地政学的に大国の周縁に位置してマイノリティ性を帯び、歴史的に言語文化的な対立や拮抗を経験してきた多元的な社会である。これらの地域では、言語・文学・ナシオンの関係性が先鋭に問いかげられ、その問題を考察する上で格好のモデルとなってきた。注目すべきこととして、近年、後述するケベックで発祥した「移動文学」概念の欧州全般への波及や、ケベックのダニー・ラフェリエール、ワジディ・ムアウッド、ベルギーのジローラモ・サンタコーノ、レイラ・ウアリ、またスイスのアゴタ・クリストフらの作家の世界的な活躍と成功に見られるように、これまで周縁的な地域の文学として、その地域(ナシオン)に固有の問題性を反映してきたかみえた各々の文学は、大国であり中心に位置するフランスを始め、仏語圏全般に影響力を及ぼし、仏語圏文学の再編を促し始めていることである。フランスでの受容にも大きな変化が見られ、これまでケベック、ベルギー、スイスの作家はフランスで出版されると、普遍性の名のもとに評価され一律に仏語表現の作家としてフランス文学のなかに吸収されてしまった傾向が強かったが、大学での講義でも明示的に取り上げられ、脱周縁化したトランスナショナルな動向を帯びた新たな展望のもとでの仏語圏文学の研究の機運が高まってきた。

さらに本研究課題を着想するに至った具体的なきっかけとしては次のような要因が挙げられる。

(1)研究代表者である真田の科学研究費補助金(基盤研究C)による研究課題「ケベックを中心とする 仏語圏文学にみるトランスミグランス - 移民作家受容の比較研究」(H21 年度—H24 年度、課題番号 **21520357**)の研究成果より導き出された新たな問題提起がある。すなわち、ケベック文学において移民の文学が、グローバル化の時代を象徴する流浪や彷徨、混淆、アイデンティティの変容など、その先鋭なテーマと美学的特徴によって注目され、移民文学ならぬ「移動文学」*l'écriture migrante* と呼ばれて定着し、若い世代へも影響を及ぼし、トランスミグランスと云いする強い影響力と独自の存在感を持つに至った。(「移動文学」については、拙著『トランスカルチュラルリズムと移動文学』2006 年、彩流社、参照)先の研究課題ではこの状況に着目して敷衍的に研究し、ケベックと比較してフランスを中心とする他の仏語圏において移民作家がどのように受容されているかを比較検証した。その結果、画期的なこととして、ケベックで発祥した「移動文学」の概念は欧州にも波及し、**2012** 年にはこの「移動文学」の概念に則って、フランスで初めてのフランスに移民した作家を網羅した『フランス移動文学作家事典』[1981-2011] が出版されていることが分かり、グローバル化の時代を象徴する一つの文学ジャンルとして影響を及ぼしていることが判明した。(この事典の編纂の経緯と内容の分析、フランスでの仏語圏文学の新しい動向については、論文「ケベックにおける『移動文学』の浸透と波及—仏語圏文学とトランスミグランス」『阪南論集・人文自然科学編』49 巻 2 号、において詳しい分析を行った。) その他ケベックを拠点に活躍するレバノン出身の劇作家ワジディ・ムアウッドの活躍やケベック在住のハイチ系作家ダニー・ラフェリエールがメディシス賞を受賞し仏文壇で高い評価を得るなど、脱周縁的でトランスナショナルな活躍をする作家や状況が生まれて加速していることが分かり、その研究の必要性を痛感した。

(2)研究分担者の岩本は、特にベルギー・フランス語圏の「中心」「周縁」概念とアイデンティティの問題について、**19** 世紀から現在に至る文学・芸術の諸相の研究を続けてきた。**19** 世紀末を一つの頂点とする、フランスに対する「ベルギー性」(ゲルマン性、北方性)確立の模索の過程は、学術振興会研究成果公開促進費により単著として出版した(『周縁の文学—ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』松籟社、**2007**)。続いて、国家/地域/都市レベル、仏・蘭・独の言語横断性、ラテン/ゲルマンを横断する精神性などの<多層的ナショナリズム>の諸相について分析・解明を進めてきた。さらに中心(フランス)と差異化すべき周縁性や前衛性、外へと開かれた「国際性」について追及し、国家存続さえ危うい現在のベルギーの仏語表現作家たち(アメリ・ノトン、ジャン＝フィリップ・トゥーサンなど)は外向きのベクトルを持ち、単に「仏語圏の作家」という意識が顕著であることが明らかになった。そのような傾向に加え、「移動文学」概念の導入によって、多様な方向性を持つベルギーのトランスナショナルな文学動向を、新たな視点から研究することが可能になるであろうと思われた。

(3)このような関心のもとで、研究代表者の真田と研究分担者の岩本はすでにケベックとベルギーの比較研究に着手していた。その一つとして **2012** 年 **10** 月には、真田が所属する日本ケベック学会の全国大会 において、岩本が代表を務めるベルギー研究会との共催でワークショップ「ケベックとベルギー：フランス語圏の多元社会—政治、言語、文学」を企画し、他の研究者とともに、真田がコーディネーター兼報告者、岩本がコメンテーターとして参加して研究発表を行った。このワークショップでの比較検証を通し、ケベックと仏語圏ベルギーは、フランス語使用、周縁性とマイノリティ性という共通の特徴を持ちながら、異なったパラダイムをもつ

多元社会であることが明確になった。それが文学とナショナリズムの関係、文化的アイデンティティの形成に大きな影響を及ぼしていることも明らかになった。これらの要因は、各地域の文学の脱周縁的でトランスナショナルな動向にも影響を及ぼしていると考えられる。

以上のような背景と関心のもとに、研究課題「ケベック、ベルギー、スイスを中心とする仏語圏文学にみる脱周縁性とトランスナショナルな変容」を着想するに至った。

2. 研究の目的

(1)ケベック、ベルギー、スイスの仏語圏文学で脱周縁的でトランスナショナルな動向をしめす作家や文学概念に注目し、それらが今日、フランスを中心とする仏語圏全般でどのように評価されているかを分析し明らかにすることめざす。特にかつての仏語圏出身の作家のフランスでの受容のされ方との違いに注目して分析を行う。

(2)ケベック、ベルギー、スイス、フランスの歴史的、社会的要因について分析し、それらが脱周縁的でトランスナショナルな今日の文学的動向のどのように影響しているかを分析し明らかにすることをめざす。

(3)ケベック、ベルギー、スイスの脱周縁的でトランスナショナルな動向をしめす文学の影響によって、仏語圏文学自体がどのように再編され変容しているかを、教育や出版、メディアでの扱われ方などを通して分析し明らかにすることをめざす。

(4)本研究は、文学研究を基礎にしながら、ケベック、ベルギー、スイス、フランスの地域研究や文化研究とも密接に結びつく横断領域的な研究である。本研究課題であるトランスナショナルな動向の分析によって、ナショナリズムやグローバリゼーションの解明にも寄与することをめざす。

3. 研究の方法

研究方法は、文献収集とコーパスのテキスト分析、作家、専門家へのインタビュー、新聞、雑誌の記事、教科書等の二次資料の分析、共同討議と分析を中心に行う。研究代表者の真田は、ケベック文学の脱周縁的でトランスナショナルな動向と受容する側の仏語圏の中心であるフランス社会の変容について検証を進める。研究分担者の岩本は、ベルギー仏語圏およびスイス仏語圏文学の脱周縁的でトランスナショナルな動向を中心に検証する。海外の研究協力者の協力も仰ぎ、仏語圏文学全般の変容と再編について共同討議と検証、分析を推し進める。また国際学会での発表、国内外の学会誌への投稿、シンポジウムの企画等によって積極的に研究成果を発表する。

4. 研究成果

研究代表者の真田の本研究課題に関する研究業績の各々の概略は下記の通りである。

(1)2013年10月に日本ケベック学会全国大会においてコーディネーターとして企画したワークショップ『ケベックとベルギー：フランス語圏の多元社会 言語・政治・文学』について総括を行い、日本ケベック学会の学会誌『ケベック研究』第6号(2014年9月)にまとめとして「目的と総括」研究発表論文「『国民文学』から『移動文学』へ：ケベック文学の多元化とその波及」(業績欄参照)を執筆した。ワークショップでのケベックとベルギー双方からの検証を通し、両地域の多元社会の質の違いが浮き彫りとなり、両地域の言語政策や文学動向の世界的な影響力が明らかになった。さらにベルギーの拮抗する共同体の共存とその民族性に依拠するあり方と、ケベックのマジョリティとしての核を維持しながら多様なマイノリティを包摂するあり方の違いに見られるように、「ナショナル」な意味の重層性が浮かび上がり、言語と民族を基軸にした「ナショナル」なものが意味するところの差異と変容が、両地域の今後の研究にとって重要なテーマとなることが明らかになった。

(2)2014年秋のスコットランド、スペインのカタルーニャでの独立を問う住民投票の動向を受けて、それらの地域とケベックとのナショナリズムをめぐる社会的背景と特徴について比較検証を行った。この検証は、季刊『民族学』編集部より依頼を受け152号(2015年4月)の特集「西洋社会の多様性」へ寄稿した論考「ケベック、北米に薫るフランス系文化 交錯する言語ナショナリズムとコスモポリタニズム」において行った(業績欄参照)。分析の結果、歴史的に抑圧された地域の状況とマイノリティの抵抗として現れたナショナリズムのあり方において、ケベックと他の諸地域には共通性が認められた。一方、ナショナリズムの発露としての文化政策の推進や文学を始めとする表象芸術、パフォーミングアーツの隆盛に、ケベックのナショナリズムの独自性が見いだされ、この特徴がケベックのトランスナショナルな動向と結びついているとの知見を得た。

(3)カナダ・ケベックならびにパリを中心に活躍し、今日フランス語圏全般で高い評価を得ている劇作家のワジディ・ムアワッド(Wajdi Mouawad)の作品に注目し分析を行った。レバノン出身で内戦に翻弄される人々の姿を描き人間性への深い洞察を繰り広げるムアワッドは、レバノン、フランス、ケベックと移住したトランスナショナルな視点のもとで戦禍の記憶を検証し、極限の状況で炙り出される普遍的な人間性を明らかにしながら、現代の喫緊の課題である移民・難民問題に新たな光を投じている。この研究成果は論考「W.ムアワッドの戯曲にみるトランスナショナルな戦禍の記憶」(2016年3月、業績欄参照)としてまとめた。

(4)2016年2月には阪南大学あべのハルカスキャンパスにおいて、ベルギー研究会との共催により第一回日本ケベック学会西日本地区研究会を開催し、真田と岩本はともに企画・運営に携わり、研究報告の司会およびコメンテーターを担当した。研究会のテーマは「ケベックとベルギー：その言語状況と舞台芸術」で、それぞれの研究発表と討論を通して、ケベックとベルギーの両地域は、ともに複雑で多層的な言語状況のもとで緊張関係を孕む多文化社会を形作ってきたが、そうした社会背景はとりわけ舞台芸術や文化政策に色濃く反映され、今日、世界的にも注目を浴びるトランスナショナルな舞台芸術の発展に結びついていることが明らかになった。

(5)2016年5月に、ケベックを中心に世界的に活躍する劇作家W.ムアウッドが来日し、静岡芸術劇場で自らの劇作を上演した際インタビューを行った。ムアウッドについては、昨年度すでに、作品のトランスナショナルな特徴について分析を行っており有意義な示唆を得ることができた。また10月には、ケベックを中心に活躍するベトナム系仏語表現作家キム・チュイ(Kim Thúy)が来日しインタビューを行った。キム・チュイはフランスで早々と評価され、フランス語圏全般で幅広く受容されているが、その独自性とは、苦難に満ちた難民の体験が独特の語りとポジティブな発想と人生観、すなわち脱周縁的創造力によって普遍性にまで高められていることに注目し、論文「ベトナム系仏語表現作家キム・チュイにみる難民の語りと脱周縁的創造力」(2017年3月、業績欄参照)において検証した。また仏語圏文学が、主に翻訳を通して日本文学にどのような影響を与えたかに関心を持ち、東京大学において『比較文学研究』を中心とする文献調査を行い、ロートレアモン研究とその翻訳で著名な石井洋二郎東京大学名誉教授へのインタビューを行った。

(6)2017年9月に京都で開催された世界フランス語教授連盟(FIPF)アジア太平洋部会(CAP)と日本フランス語教育学会(SJDF)共同開催による国際学会において "Transformations d'esthétiques: échanges interculturels entre oeuvres littéraires japonaises et francophones" と題された研究発表を行った。その中で、20世紀初頭の日本にフランス近代詩を初めて本格的に翻訳し、日本語に大きな変容をもたらした堀口大學の訳業と、20世紀ケベックを代表する詩人の一人であるジャック・ブロー(Jacques Brault)の作品が日本の芭蕉や西行などの詩歌に大きな影響を受け、その仏語表現文学の芸術性に大きな変容をもたらされたことを検証した。この研究発表では、ケベックを始めとするフランス語圏の文学と日本の文学が互いに影響をもたらし合い、そのトランスナショナルな変容を通して新たな文学的価値と創造性が生み出されたことを明らかにした。

(7)2017年9月に京都で開催された国際学会で、ジャック・ブローと堀口大學との比較研究について行った研究発表の成果を仏語論文「Transformations d'esthétiques : échanges interculturels entre oeuvres littéraires japonaises et francophones --- A travers des analyses d'oeuvres de Daigaku Horiguchi et de Jacques Brault ---」としてまとめた。この論文はWEB上の国際学会論集に掲載された(業績欄参照)

(8)2018年度の主要な研究実績としては、早稲田大学名誉教授の立花英裕教授らと協同し、黎明期から現代までの主要なケベック詩を研究し訳出した。ケベックの詩は、ホワイトニグロと呼ばれ長らく英語系に抑圧された歴史的経緯を背景に、カリブ海地域で発祥したネグリチュード運動とも連動し、抑圧への抵抗から北米のフランス系としてのアイデンティティの開花へと至るケベックの状況を鋭く反映してきた。ケベックの詩は、周縁的で閉鎖的な社会であったケベックが脱皮して、世界的な動向と呼応して解放されていく過程を如実に映し出しており、ガストン・ミロンの詩に代表されるように、抵抗と解放の象徴的かつ普遍的な表現として今日、注目されている。従って、ケベックの詩を分析し、訳出して紹介することは、研究課題であるケベックを中心とする仏語圏文学の「脱周縁的でトランスナショナルな変容」の重要な側面を明らかにすることになった。この成果は『ケベック詩選集』(立花英裕・真田桂子編訳、彩流社、2019年6月刊行、業績欄参照)としてまとめられた。その中で真田は、日本でのアンソロジーの翻訳にあたり、ケベック詩の変遷について解説した詩人でモントリオール大学名誉教授のピエール・ヌヴーの序文を訳出するとともに、アンヌ・エペール、ジャック・ブローらのケベックを代表する詩人の作品を訳出して解説した。

研究分担者岩本の本研究課題に関する主な研究業績の概略は下記の通りである。

(1)19世紀から現代に至るまでベルギーの仏語文学において重要な特徴をなす「幻想性」について、フランス文学との相違、ドイツやラテンアメリカとのトランスナショナルな連関性を通してその特徴を探った。その研究成果は、論文「ベルギーの幻想文学 現実と非現実のはざまー」(『国際文化学研究』第45号、2015年、業績欄参照)としてまとめた。

(2)ベルギーの仏語圏文学における脱周縁的でトランスナショナルな動向をしめす作家や文学概念に注目し、それらが今日、フランスを中心とする仏語圏全般でどのように評価されているかの分析を進めた。その研究活動の一環として「ベルギー文学」翻訳出版企画を行い、共訳『幻想の坩堝-ベルギー・フランス語幻想短篇集』(松籟社、2016年)として刊行した。オランダ語での現代小説翻訳刊行も一方で進められており、実際にテキスト分析や作家研究を進める中で、国家/地域/都市レベル、仏・蘭・独の言語横断性、ラテン/ゲルマンを横断する精神性などの<多層的ナショナリズム>について、改めてその諸相に注目することになった。文学を中心に領域横断的な研究も進め、その成果を共著『ベルギーを<視る> テキスト-視覚-聴覚』(松

籟社、2016年)として刊行した(業績欄参照)。

(3) 2016年3月のブリュッセル空港・地下鉄駅でのテロ事件は、フランスのみならずベルギーでも「移民」の存在とその社会的統合や文化的アイデンティティの問題が重要な課題であることを世界に知らしめ、関心を引くこととなった。もともと多文化主義を尊重し外国人や移民に対しては、生地主義に基づく国籍取得の容易さもあって寛容な国であったベルギーだが、近年は他のヨーロッパ諸国と同様、EU域外、とりわけ中東や北アフリカ方面からのイスラム系移民への偏見や差別意識が高まっている。その原因はさまざまであり、またベルギーの移民に限ってもその出身国や社会的地位は時代ごとに変遷してきた。このようなベルギーの移民史や社会統合、また文化政策について、文献資料とこれまでのブリュッセルでの移民地区調査を踏まえてある程度まとめ、発表の機会を得た。「移民の国ベルギー 多文化共生への道のり」(岡山県国際交流協会地球市民講座、2016年9月) <Immigrants and Cultural Policy in Belgium> (神戸大学国際文化学研究推進センター「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」キックオフシンポジウムでの英語発表など、業績欄参照)。

(4) 2017年9月京都で開催された世界フランス語教授連盟(FIPF)アジア太平洋部会(CAP)と日本フランス語教育学会(SJDF)共同開催による国際学会において、シンポジウムにおける招待講演として"Qu'est-ce que la littérature belge?"と題された研究発表を行い、ベルギーの仏語圏文学における脱周縁的でトランスナショナルな動向をしめす作家や文学概念に注目し、実際のテクスト分析や作家研究を通して、国家/地域/都市レベル、仏・蘭・独の言語横断性、ラテン/ゲルマンを横断する精神性など、ベルギーの<多層的ナショナリズム>の諸相が顕著となっていることを明らかにした。

(5)ベルギーのフランス語による「移民文学」に注目し、その越境性や多層的アイデンティティの在り方について考察した。具体的には、すでに周縁・多層性を擁するベルギーのフランス語文学において近年(フランス同様)活躍が顕著化している移民系作家の中から、トルコ移民二世のフランス語作家であるケナン・ゴルグン Kenan Görgün に焦点を当てて、一連の作品分析を通してアイデンティティ探求の足跡を辿った。起源としての民族意識を持ちトランスナショナルな状況を生きている作家だが、初期は「移民作家」のレッテルを避けて敢えて自らの起源をテーマにせず単に「ベルギーのフランス語作家」として執筆していた。しかし「精神の危機」を経て父親と逆向きにトルコへの「移民」となってこの国を内側から見ることにより、一転してトルコ民族や移民を明確に問題化する一連の作品を書くようになり、またそれらの集大成としての演劇作品は自ら主演として演じた。メタフィクション性や間テクスト性の実験が次第に増し、脱中心化・脱領域化を実践しつつ移民作家として「書くこと」を「幻の国に住む」という表現で象徴させるに至り、またそれらを通して「ベルギー人」としての多層的自己の発見にも繋がったことなどを確認した。その研究成果は「ケナン・ゴルグンの表象における多層的アイデンティティー ベルギーのトルコ移民二世フランス語作家と「幻の国」」(共著 岩本和子/井内千紗編著『ベルギーの「移民」社会と文化 新たな文化的多層性に向けて』、籟社、2019年12月刊行予定、業績欄参照)として発表する。

研究の総括としては、研究代表者と分担者のそれぞれの研究と共同討議から、ケベック文学においては、脱周縁的でトランスナショナルな動きは、W.ムアウッドやキム・チュイの例にみられるように、今日の移民・難民文学が孕む普遍性と先進性によってケベックを超えた地域への影響力と広がりが顕著であることが明らかになった。またケベック詩の翻訳研究を通し、ケベック文学のマイノリティ性には、世界文学と共鳴するトランスナショナルな影響が刻印していることが明らかになった。一方ベルギーでは、移民文学への認識は徐々に高まりつつあるとはいえまだ相対的で、ケナン・ゴルグンの例にみられるように、ベルギー国内の多層的アイデンティティを反映し想像的領域において台頭していることが検証された。スイス仏語圏の文学については検証を行っており、現時点ではいまだ十分な成果として発表できなかったが、今後の研究課題として発展させたい。このように本研究から、ケベック文学とベルギー文学における脱周縁的でトランスナショナルな動向の興味深い共通点と相違点、仏語圏文学全般へ影響を及ぼし再編を加速する動きが浮き彫りになった。なおこれまでの研究成果は、研究代表者と研究分担者が、各々の業績において個別に発表してきたが、今後も引き続きこの課題の考察と検証に取り組み、将来的にはこの課題の研究成果をもとにした共著の執筆も企画している。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計9件)

SANADA, Keiko, "Transformations d'esthétiques : échanges interculturels entre oeuvres littéraires japonaises et francophones --- A travers des analyses d'oeuvres de Daigaku Horiguchi et de Jacques Brault ---", *Revue japonaise de didactique du français numero special, Federation internationale des Professeurs de Français, Actes du IVe Congrès régional de la Commission Asie-Pacifique(Web Acte)*, *Revue de SJDF, Actes du IVe Congrès de la CAP, Axel 146(1-10)*, 2018 査読有
http://sjdf.org/pdf/cap2017kyoto_actes.pdf

IWAMOTO, Kazuko "Immigrants and Cultural Policy in Belgium",

神戸大学大学院国際文化学研究科紀要『国際文化学研究』50号、2018、31-41、査読有

岩本和子、「マーテルランク「夢の研究」の謎 未知の世界との交感 - 」
神戸大学大学院国際文化学研究科紀要『国際文化学研究』48号、2017、17-48、査読無
真田桂子、「ベトナム系仏語表現作家キム・チュイにみる難民の語りと脱周縁的創造力」
『阪南論集・人文自然科学編』52巻2号、2017、55-64、査読無
<http://id.nii.ac.jp/1104/00000959/>

真田桂子、「W. ムアウッドの戯曲にみるトランスナショナルな戦禍の記憶」
『阪南論集・人文自然科学編』51巻2号、2016、111-120、査読無
<http://id.nii.ac.jp/1104/00000566/>

真田桂子、「ケベック、北米に薫るフランス文化 交錯する言語ナショナリズムとコスモポリ
タニズム」季刊『民族学』152号、2015、46-56、査読有

岩本和子、「ベルギーの幻想文学 現実と非現実のはざまー」

神戸大学大学院国際文化学研究科紀要『国際文化学研究』45号、2015、27-53、査読無

真田桂子、「ケベックとベルギー：フランス語圏の多元社会 言語・政治・文学、目的と総
括」日本ケベック学会『ケベック研究』6号、2014、87-89、査読無

真田桂子、「「国民文学」から「移動文学」へ：ケベック文学の多元化とその波及」
日本ケベック学会『ケベック研究』6号、2014、119-128 査読有

〔学会発表〕(計3件)

SANADA, Keiko, "Transformations d'esthétiques: échanges interculturels entre oeuvres littéraires japonaises et francophones", Federation internationale des professeurs français, IVe Congrès régional de la Commission Asie-Pacifique —Ecologie du français & Diversité des langues— (国際学会), 2017

IWAMOTO, Kazuko, « Qu'est-ce que la littérature belge? », (Table Ronde, Littérature francophone) », Federation internationale des professeurs français, IVe Congrès régional de la Commission Asie-Pacifique Ecologie du français & Diversité des langues (国際学会、招聘発表), 2017

IWAMOTO, Kazuko, "Immigrants and Cultural Policy in Belgium" (英語)

ick-Off Symposium for JSPS Core-to-Core Program,

Session 5: Cultural Policy about Immigration and Refugees, 2016

神戸大学国際文化学研究推進センター、日本学術振興会研究拠点形成事業(A.先端拠点形成型)キックオフ・シンポジウム『日欧圏におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成』)

〔図書〕(計4件)

真田桂子、立花英裕編訳、その他訳、『ケベック詩選集』、彩流社、2019、380頁

岩本和子、井内千紗編著、『ベルギーの「移民」社会と文化 新たな文化的多層性に向けてー』
松籟社、2019年12月刊行予定

岩本和子、三田順編著、『ベルギーを<見る> テクスト、視覚、聴覚』、松籟社、
2016、183頁(15-42)

岩本和子、三田順編訳、その他訳、『幻想の坩堝 ベルギーフランス語幻想短編集』
松籟社、2016、312頁(3-28、255-279)

〔その他〕(計1件)

岩本和子、「移民の国ベルギー 多文化共生への道のり」(講演)、岡山県国際交流協会地球市民講座、2016年9月

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：岩本和子

ローマ字氏名：IWAMOTO, Kazuko

所属研究機関名：神戸大学

部局名：国際文化学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：60203410

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。